



TITLE:

灼熱の太陽が4個も見える話

AUTHOR(S):

三浦, 榮五郎

---

CITATION:

三浦, 榮五郎. 灼熱の太陽が4個も見える話. 天界 1940, 20(231): 274-276

ISSUE DATE:

1940-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168027>

RIGHT:

## 灼熱の太陽が4個も見える話

中央氣象臺技師 三浦 榮五郎

お隣りの支那は固より、日本でも、歐米でも、昔から太陽やお月様を宗教的に取扱ひ、之等を崇拜する國民の多いのは、何の不思議でもない。科學的に研究しても、すればする程、此等の天體が有難い事は判明する。太陽なしには、吾々始め動植物の生存が出来ないだらう。太陽禮讃は先づお預かりとして、鬼に角我々の地球には1箇しかないこの有難い太陽が、2個も3個もお姿を現すのを見かけるといふ人が往々あるが、果してそれは本當だらうか？

佛法の方で、彌陀三尊の御姿を拜する等といふのも、それらしい。これは實際に出現する現象で、決して作りごとでも、或は心の迷ひでも、目の錯覺でも、何でも無い。それは、氣象學の方では、“幻日”と稱するもので、“暈”即ち俗にいふ“御笠”の一部分である。太陽の周りに出る光輪は“日暈”，月に出るのは“月暈”と稱へる。他の名稱も之れに倣ふ。多くの場合は、日月を中心とせる白色又は虹色を呈する大きな光輪であるが、時には色々複雑した形を現すものである。

暈（ハロ，Halo）は、卷雲や卷層雲の如き氷晶から出来てゐる雲層に現れるが常で、又、時としては、雲と迄行かないが、空中に漫遊してゐる氷晶のために現れることもある。最も普通に現れるのは内暈で、半径20度ある。

また時に半径46度の暈が出る事がある。これを“外暈”と稱する。孰れも輪の外側が紅色を呈する。その他、暈には種々の部分がある。

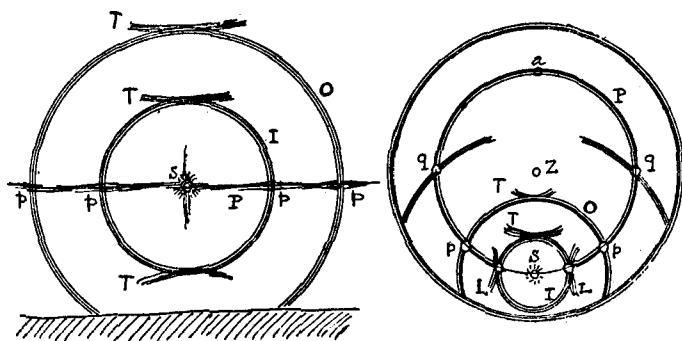
幻日即ちにせの太陽 挿圖の中心(S)は、本當の太陽であるが、左右4個のPは質せ物で、これ等を“幻日”と稱する。もちろん眞物の太陽のやうに圓くなく、多くは卵形か、鰹節形である。澄み切つた青空に、薄い白色の卷雲や、卷層雲の一部分が飛んで来て、丁度幻日の現はるべき位置に行くと、非常に照り輝ける幻日を現はす事がある。こんな時には全く別個の太陽の出現かと疑ふのも、決して無理ではない。この、幻日のみ現はれて、光輪が現はれないこともある。又、内暈が極く薄く、幻日のみがハッキリ現はれることもある。

内暈の上方にも蛾眉形、即ち觸角のやうな形狀をなし著しく輝く事がある。これを“上端光弧”と稱するが、必ずしも現はれるとは極つてゐない。又、判然蛾眉狀を呈しないまでも、略々そんな形で輝いてゐる。これも別個の太陽の出現かと見誤まれる。

内暈には、また、“下端光弧”と稱し、内暈の下部に接する弧がある。その接觸部が特に輝いて、別個の太陽と見誤れることもある。即ち、左右4個の幻日

と、是等上下の2個の光點と都合6個の質太陽が現はれる可能性がある。

暈の家族の内、吾々の頭上、即ち天頂に、虹のやうな弧が現はれることがある。圖のやうに外暈に接し、反對に彎曲してゐる。時には非常に美しい7色を呈し、不思議なところに虹が出たと思ふこともある。これは“天頂弧”と稱するもので、暈の一部である。高山等で時々見られるが、外暈の左右斜下にも、圖の如く彎曲せる光弧が接することがある。これを“傍切光弧”と稱する。この外に“橢圓暈”と稱するものがある。それは太陽の高度が45度の時に、内暈に接してゐる上端下端兩光弧が相連つて橢圓をなすものである。



**幻日環** これは水平な光帯で、太陽や幻日を貫くことがある。幻日を遠ざかるに従ひ、光は次第に弱くなるが、發達せるものは地平線に平行して、この光帯が殆んど天球を一周することがある。

**十字光** 太陽を垂直に貫く光帯も現はれることがある。之が水平の幻日環と交り、十字形になる。幻日環は往々出るが、十字光は珍しい。

**太陽柱** 北海道等の如き寒地では、冬季太陽柱と稱するものが現はれることがある。太陽の上方15度か、20度位まで輝く光柱で、上方で光つてゐる。

“**白虹を貫く**” 昔の本にある文章で、動亂の兆とする者もあつた。種々の本の中から3つ4つ拾つて見ると「聶政刺韓傀白虹貫日」、「昔者荊軻慕燕丹之義白虹貫日」、「荊軻發後太子自擔氣見虹貫月不徹日吾事不成」、「精誠貫白虹」、「精貫朝日氣凌虹霓言忠誠也」等々種々ある。これは支那一流の觀象占法で、一種の迷信に過ぎない。この貫日といふのは恐らく前に述べた幻日環を言つたものだらう。

**環**(コロナ Corona) 同じく日月の周りに現はれる御笠でも、コロナ(環、日環、月環等)と稱する光輪がある。これは暈に較べると、極めて小さい。ほとんど日月に接近して現はれることもある。尙ほ、池に投石せし時の波紋の如く、二重にも三重にも接續した光輪が現はれることがある。虹のやうに美しく、色彩

鮮かなこともある。コロナは水滴の雲に多く現はれる。これは暈と異り光線の廻折作用による現象で、輪の外側が紅色を呈する。巻積雲、高積雲の如き團塊の雲では、往々全圓をなさず、その一部分のみを現はすことが多い。

**ビショップ環** (Bishop's Ring) 幅廣い光輪で、内径が10度ぐらゐ、外径が20度もあるので、暈と間違へられるが、外側が紅色の爲め區別が出来る。これは雲層に出来るものではなく、細かい火山灰が空中高く噴き上げられたために生じるもので、日光の廻折現象である。1883年八月クラカトア火山の大爆發の際この現象をハワイのビショップが發表したので、この名が出た。(「讀賣新聞」より)

## 易の龍と廣東の天龍

後 藤 朝 太 郎

支那に於ける龍の起原は先づ文字の上から考へると、その3代に於ける龍は正しく音符の「竜」と肉の字の象形とそれとその右半のものから組立てられてゐるのである。殷代龜甲獸骨の卜辭の上にも見出さるゝが、その形は足のある一種の爬蟲類として考へられる。それが果して地質學上古生物時代の大爬蟲類を暗示したものであると斷するわけにはいかぬ。周易の易の字は元來はトカゲ(蜥蜴)であるのだが、その易の姿は繪のやうに古くは描かれてゐる。でもとはカメリオンの如き動物であつて、色のよく變化する所からとられてゐるのである。易は變易なりとも云はれてゐる。古くから又變易で立派に通つてゐる。所がこの龍の方は爬蟲類で相當高い所にも登るのである。廣東廣西兩省にまゐると樹上に攀登する爬蟲類が今日實在してゐる。廣東人は之をテンルン天龍と稱してゐる。

自分は廣東の市場で求めて來たと云ふ天龍を市中で見た。幾匹か長壽街兩儀軒の主人から見せてもらつた。箱の中からとり出して尾の所を摘んでぶらさげる。すると首を上の方へ持ちあげて來て舌をペロペロ出して來る。身長は4尺4,5寸、そして、それに退歩した足が4つ付いてゐた。全體の姿は蛇そつくりなのである。唯4肢を有する所が違ふのみであるが、トカゲ(蜥蜴)ではない。廣西の梨州の郊外にまゐるとこの天龍は、榕樹の森の樹枝にも棲息してゐると云つてゐた。親しく自分の見たものは薄黃色を呈してゐたと記憶する。これが果して周代又はそれ以前からの龍そのものに一致してゐるかどうかは未詳なるも、採つて以つて參考とするに足りしものであると思ふ。

(「支那文化に見る龍」より)